

元山口組 伝説のヤクザが語った！

宅見若頭 暗殺の内幕、五代目追放劇の真相

『鎮魂 さらば、愛しの山口組』 8/30 発売

株式会社宝島社(代表取締役社長:蓮見清一 本社:東京都千代田区)は、2013 年 8 月 30 日、元山口組直参組長の自叙伝、『鎮魂 さらば、愛しの山口組』を発売いたします。

本書は、かつて山口組の田岡三代目を脅かした「大阪戦争」の最大の功労者である元山口組盛力会会長が、苛烈な半生と組織内権力闘争の黒歴史を語り明かすオール実名、本格ノンフィクション作品です。

大阪戦争の真実をはじめ、宅見若頭暗殺事件の真相、司忍6代目体制誕生の内幕など、カネと野合、憎悪が渦巻く巨大組織の知られざる背景と真実が余すところなく語られています。

<著者プロフィール>

盛力健児 (せいりき・けんじ)

昭和 16 年 5 月 29 日、香川県三豊郡(現・観音寺市)に生まれる。昭和 42 年 5 月 3 日、山本健一・山健組組長(後に三代目山口組若頭)から親子の盃を受け、若頭補佐として山健組入りし、「盛力会」を設立。

昭和 54 年、大阪戦争の最中に起こったベラミ事件(敵対する松田組傘下組織による田岡一雄・三代目山口組組長銃撃事件)で報復の先陣を切り、大阪府警捜査四課に逮捕される。昭和 55 年 3 月、懲役 16 年の実刑が確定して宮城刑務所に。平成元年 6 月、獄中で五代目山口組の直参に昇格。平成 8 年、同刑務所を出所し、以降、五代目山口組、六代目山口組の直参として盛力会を率いるが、平成 21 年 2 月、山口組内の直参大量処分騒動に巻き込まれて除籍処分を受け、引退。

平成 16 年、中国「嵩山少林寺」の素喜大師から弟子と認められ、引退後は嵩山少林寺グループの会長として道場の設立を目指す。法名「釋徳盛」。



撮影：井賀孝



『鎮魂 さらば、愛しの山口組』

発売日：2013 年 8 月 30 日

価格：1500 円(税込)

発売元：宝島社

<プロローグより>

「なあ、盛力よ、お前はヤマケンの指示に従っただけやろが。早う、唄て楽になれや」

府警の狙いは、盛力の親分で、三代目山口組の若頭を務めていた「ヤマケン」こと、山本健一・山健組組長にあった。

～ 中略 ～

「刑事さん、ワシに『死ね』言うんか？」

それまで盛力は、どれほど過酷な取り調べが続いても、絶えず背筋を伸ばし、決して姿勢を崩して、調べに応じるなどということはなかった。そんな彼がとった「頬杖」という恰好を、刑事が奇異に感じる間もなく、盛力はそのまま、両肘を机の上に打ちつけ始めた。

「ドーン！ ドーン！」という鈍い音が二度、三度響いたかと思うと、盛力の口から鮮血が噴き出した。
 「お、おい、こら！ な、何しとるんじゃ！ 止めんかい！」
 「このガキあ！ 舌、噛み切りやがった！」
 「頼むから、止めてくれ！ 止めてくれえ！」

椅子から崩れ落ちた盛力の体を必死に起こそうとする刑事たち。たたみ二畳ほどの取調室の床に、ゆっくりと血だまりが広がっていった……。

その後、一命を取り留めた盛力は、殺人罪などで起訴され、この約1年後の昭和55年3月31日、懲役16年の判決を受け、宮城刑務所に服役する。

そして前述の大阪戦争、ベラミ事件での報復において、「山口組最大の功労者」といわれた盛力は長期刑を経て、平成8(1996)年1月に出所、山口組に復帰した。

だが、その直後から組織中枢部の暗闘や権謀術策の渦に巻き込まれ、その「功労」とは対照的な不遇をかこつこととなる。そしてついに平成21(2009)年、六代目山口組執行部から「除籍」処分を受け、失意のまま山口組を去ることになるのだ。

(「まえがき」より インタビュー・構成 西岡研介)

< 目次 >

- 第1章 大阪戦争 頭、降ろされるで／幻の「ボンノ襲撃計画」／「日本の首領」が撃たれた ほか
- 第2章 ^{かえし}報復 宅見に見られた／「せんとあかん！」／「最後は俺で止める」／誰が鳴海を殺したか／「第三次頂上作戦」／稲川会の石井隆匡に「親父を頼みます」／一世一代の大芝居
- 第3章 血統書つきの野良犬 食べられなくてヤクザに／「血統書つきの野良犬」／山本健一との出会い ほか
- 第4章 山健三羽カラス 「渡辺よりも座布団は上やった」／京都刑務所で「盛力」と改名／橋本弘文から「詫び状」を取る／山本健一、山口組若頭に就任／宅見勝との因縁 ほか
- 第5章 懲役16年 司忍・現六代目組長との出会い／山本健一若頭の死／「山一抗争」勃発／渡辺芳則が五代目に就任 ほか
- 第6章 出所 ベラミの勲章／山口組の変質／山口組を“カネ”の組織にした元凶／桑田・三代目山口組組長との確執／田岡満と竹中武／五代目の「使用者責任」訴訟を阻止／中野と桑田の「和解」に動く
- 第7章 「宅見若頭暗殺事件」の深淵 中野が撃たれた！／渡辺五代目と宅見若頭が決裂／独り、憔悴しきっていた五代目／四代目実弟「竹中武」の最後の奉公 ほか
- 第8章 「クーデター」の真相 「入江よ、親の仇は取らなあかん！」／中部国際空港の利権を巡るトラブル／司忍からの1億円／クーデター勃発／山健組支配の終焉 ほか
- 第9章 さらば、山口組 「連判状」を模した怪文書／粛清の嵐／理由なき処分／「任侠魂だけは残ってまっせ」／「嵩山少林寺」の弟子に／田岡満の死／渡辺の死と「さらば、山口組」

< エピローグより >

日本最大の暴力団、山口組。警察庁によると、構成員、準構成員合わせ2万7700人と、全国の暴力団員総数の4割強を占め、指定暴力団21団体のなかでも圧倒的な勢力を誇っている(平成24年末現在)。だが、本書の著者である元山口組幹部、盛力健児氏によると「その組織が今、崩壊しつつある」という。

～ 中略 ～

「やっぱりバブルというのは人を変えたんやな。その筆頭がヤクザやったわけや。(中略)俺が懲役から帰ってきた頃には皆、カネ、カネ、カネや……」

この盛力氏の発言に象徴されるように、昭和61(1986)年～平成3(91)年のいわゆる「バブル景気」の前後から、すでに五代目に代替わりしていた山口組は「経済至上主義」に急速に傾く。それにともない、それまでこの組織を支配していた三代目、田岡一雄組長時代の「和親合一」(「組織の和を大切にする」の意)や、「長幼の序」(ともに「山口組綱領」より)など、盛力氏の言うところの「古き良き山口組」の価値観が衰退していく。

その姿はバブルに浮かれ、その崩壊とともに沈み、根腐れしていった日本社会のそれとダブる。翻ってみれば盛力氏が、自らの拠りどころとし、命がけで守ったその組織の変容を、冷めた視点から語れるのは、ヤクザ社会も含め日本全体が狂乱したバブル期に、長期服役によって社会から隔絶されていたからにほかならない。